

明清地域商人と江南都市文化

范 金 民

(松田 吉郎 訳)

要 旨

明清時代の客籍地域商人は江南において各種の文化商品を販売する活動に従事して、江南の都市の文化市場の発展を促進し、また 地方劇の劇団を育成し、演劇の上演を主宰して、江南都市における各種地方演劇文化の交流を推進する重要な役割を果たした。地域商人は民間の風俗文化を発揚し、地域の神々を崇拝し、各種の民間風俗活動に参加して、民間の祠廟や寺観等による宗教文化活動に対して資金を提供して協力した。また、彼らによって建設された壮麗な会館などの施設は、江南都市の地域文化を豊かなものにした。更に、彼ら江南の名士と互いに関係を取り結び、親密な相互交流のネットワークを作り上げたのである。

キーワード：客籍，地域商人，江南，都市文化，名士

明清時代の江南都市は、商品生産が持続的に発展し、商品の流通が盛んで壮観であった。また、商人活動は十分に活発であり、全国でも極めて重要な経済の中心であった。そして、高度に発達した経済は必然的に文化的繁栄と社会的進歩をもたらした。江南の都市教育は発達し、黌序（学校）は壮大であり、書院が林立し、書店が建ち並び、蔵書が豊富で、文才を輩出し、文人が集まり、学術流派が相照らしあい、優れて秀でた文化が繁栄・繁盛し、大衆文化が咲き並び、地域文化が美しく目を奪うほどであった。江南都市はまた全国でも極めて重要な文化の中心であった。

社会各階層はお互いに絢爛たる江南都市文化を映し出し、江南都市文化の偉大な大橋を構築していた。また江南都市文化の建設のために相応の貢献をなした。本論ではただ商人の活動という角度から外籍地域商人の江南都市における文化活動を考察し、それと江南都市文化との関係を検討しているだけであるが、明清江南社会

経済と都市文化研究の豊富化、深化の一助となれば幸いである。

一 文化商品の経営

明清時代の江南の蘇州、南京、杭州、常熟、無錫、湖州等の地は著名な書物刊行の中心であり、書籍の印刷部数の多さ、種類の多さ、校勘の精密さは、全国的に見ても甚だ傑出していた。万暦時期、浙江蘭溪の人胡応麟は、当時の書物出版の地は、呉、越、閩の三ヶ所が最も有名であり、中でも呉の地における書物出版が最も精密で良かったと述べている。また、胡応麟は、全国の書籍が集中する地は燕市、金陵、閩閩と臨安であったとも述べている。この説によると、南京、蘇州と杭州の三大都市は著名な書城（出版都市）であった。とりわけ突出しているのは、「呉と会稽と金陵は文献で有名であり、書物の出版も多く、巨冊や類書はみなここにあわせ集

まっている。天下の商賈の出資するところ、この二つの地が十の七、閩中が十の三であり、燕、越は与せず。そして本地方で上梓する外、他省に至るものは極めて少なく、楹を連ね、棟を麗しくし、その奇秘を蒐めても、百の二三であり、おもうにここは書物の出るところであり、集まるところではない¹⁾。そして南京、蘇州等の書物出版の中心において蔵書が家の棟までとどき運ばば牛に汗をかかせるほどの蔵書の多くは外地の商人により出版されたものである。

明末徽州休寧の人胡正言は官位を棄てた後、南京に寓居し、大量に書物を購買し、その十竹齋（胡正言の号）の家では十数名の版木職人を雇用し、五色の重ね刷りにより、『十竹齋画譜』、『箋譜』を出版し、草花羽虫であろうと、色彩は真に迫るように生き生きとしており、絵画学習用の手本となり、「大江の南北で銷られ、時の人は争い購う」と言われた。十竹齋独占経営下のおかげで姓が汪という優良職人は巨富をなした。明時期、杭州で版画が盛行し、「ほとんど歙人の手によらないものはなく、その版画の製作は全て極めて精密である²⁾」と言われていた。清中期、南京の状元境で、書坊（書店）は20余家あり、大「半は皆江右の人³⁾」であった。明末、南京で書舗（書店）を開いた周用は江西東郷県の人であり、天主教に勧誘されて入り、教堂内で経巻（聖書）を印刷し、官府に逮捕された⁴⁾。

明代、南京の有名な書坊（書店）は、近年の研究によると、60家の多きに達し、書籍の出版は戯曲、小説、医学書、時義（時人の評論）が多かった⁵⁾。この種の書物は、社会各界で需要があり、出版費用は低く、発行部数は多く、一定の豊富な利益が得られた。実際、明後期江南都市の書坊（書店）はさらに商業用書を印刷した。坊名が金陵唐氏文林閣という書舗はまた唐錦池（一時、集賢堂錦池と称した）と名づけられ、かつて『新安原版士商類要』を出版し、文林閣唐錦池出版と署名した。本書の作者程春宇は徽州の人で、「まだ子供であったときに商売に従事し、足跡がほぼ中原全土に及んだ」。晩年、「平生の見聞を記し、まとめて書物にし、天啓六年、歙県の方一桂が南京鶏鳴山を遊覧したとき、程は彼と懐旧談をし、書物の序文を請うた⁶⁾」。

この徽商を見ると南京に寓居している書商は日常の豊富な商売の経歴を利用して『士商類要』という日用ハンドブックを編集執筆したのであろう。そして程春宇と同時期の西陵の憺漪子は『天下路程図引』という一書を編集した。この憺漪子は柳存仁先生の考証によると、明末清初の汪淇であり、また汪象旭と自署し、錢塘の人であった。王振忠先生の研究によると、汪淇、字は憺漪、明末の人、杭州に僑寓していた徽州書商（祖籍は休寧）であった⁷⁾。程・汪二人の徽商は書物を編纂する50余年前、別の徽商の黄汴は当時知りえた明代第一位の商業類書8巻本の『天下水陸路程』の一書を編纂した。黄汴は弱冠で父兄に従い外に商売に出かけ、「後に呉・会稽に僑居し、二京十三省及び辺境で商賈貿易し、程図数家（路程表・地図・家の数の情報）を得て、その見聞を究め、その異同を考え、反覆して校勘し、二十七年を積んで始めて帙を成した⁸⁾」。黄汴という徽商は27年の功勞を究め、誠心誠意、実用に役立ち、後世に影響をあたえ、多く引用される商業書を編纂したのは、おそらくは自分自身が書商であったからであろう。黄・程・汪三人の徽商はいずれも江南に僑居し、いずれも商業書を編纂したが、その書は蘇州で編纂され、或は南京で刊行され、序文が作られた。自分自身の商業経歴をもとに書かれ、商品市場が発達し、書物出版・印刷の中心である江南で出版されたこれらの商業書はその販路は決して悪くなかった。もしまことにこのようであればこれらの商人がこの種の商業書を編纂・執筆することは商人の商業的実用に裨益し、同時にまた豊富な商業利潤を得ようとするためのものであった。憺漪子の『天下路程図引叙』で述べられていることは、簡単直截的な自己の宣伝広告である。商人が自分で商業書を編集・執筆することは単に文献の流布のみならず、商業文化的経営活動という意図もあった。

上述の書物出版の中心で費やされる計り知れない紙及び江南市場の書籍は江西商人、福建商人、安徽商人及び浙南商人等の地域商人が直接、江南へ販運してきたものである。清前期、潞壑関を通過した外地の紙には少なくとも光古・灰屏・黄尙・連史・元連・白鹿・毛長・对方・毛辺・江連・川連・黄表・桑皮・碑色・東坦紙等

の名品があった⁹。外地の紙商がこれらの紙を販運する主力であった。康熙五十七年、蘇州の上杭六串紙帮商人（紙類同業団体）が汀州会館を建立したが、「其の実は上杭紙業のごく一部分であった」¹⁰。小さな一県の紙商が独力で会館を建立したが、これは会館が林立する江南でもあまり見られないもので、僅かに当該県の「紙業の一部」であり、福建紙商の江南における実力がわかる。上海の建寧・汀州商人が建立した会館では、紙商は主要な寄付金拠出者の対象であった¹¹。江南の福建紙商もまた非常に有名である。張応俞の『杜編新書』第六類「牙行編」で、福建紙商の施守訓は、「家の資が殷富なれば必ず紙を製造し客に売る。一日に、自ら千余簍（籠）を積み、その価値は八百余両であり、蘇州に行って売り……家中からまた紙八百簍を蘇州に送り……翌年、また、紙を積んで蘇州に行く。」と描かれている。これは専門的に蘇州を市場としている福建紙商であるとわかる。現代人の調査によると、連成県の四堡郷は明中期から紙の製造・書物出版・全国販売で江南各地では有名であった。これらの書商は江南の南京・無錫・湖州・蘇州及び杭州等の地で活躍していた。鄒氏と馬氏宗族の多くの人がかつて郷里の書籍・紙類を江南に販運した¹²。清代南京の江西商人は陶器・竹・紙を主要な経営商品とした。嘉慶元年、蘇州における江西会館の修理で、寄付金をだした江西紙商には少なくとも南昌府紙貨衆商、山塘花箋衆商、徳興県紙貨衆商、桐城県紙商があり、合計銀1185両寄付し、1200両を寄付した麻貨衆商に次ぐものであった¹³。徽州紙商は江南で比較的活躍していた。乾隆三十八年、蘇州で徽郡会館が建造された時、皮紙帮は発起人の三大帮の一つに加わった¹⁴。浙東特に龍游の書商は非常に名声があった。明代の帰有光は「越中の人多く呉中を往来し、書を鬻ぐを以て業と為す」と言っている¹⁵。彼が語っている童子鳴は代々龍游の人であった。清初、「龍游の余氏は書肆を姿に開き、刊行した読本四書の字画（文字）には誤りが無く、遠近より購買された」¹⁶。その時、龍游の書商は蘇州ではその人数が益々多くなったようである。康熙十年、浙江書商は蘇州の閶門以北の尚義橋に崇徳公所を設立し、「同業の為に書籍の訂正を行い、原

（典）を討論する所」とした¹⁷。道光二十五年に再び規則を作り、同業者を取り締まった。粗紙筩葉を専門的に経営する浙南商人は南濠に浙南公所を建設し、「同帮の為の議公（会合）、宴会の区（場所）」となし、咸豊年間、戦火で焼失したが、同治十一年の改修時には商号が44家あった¹⁸。

外地商人は特に徽商が豊富な財力によって好んで書画、書冊、珍しい酒器・鼎を購入・集積した。おおよそ乾隆時期の成立とされる『歙西竹枝詞』は「錢が多ければ珍奇とするに足るものでなくても千金を惜しまず鼎を購う。漢の玉、哥（窯）の陶器など、好みのものに投じ、人に逢えば便宜（安い買い物）と説得す（自慢していた）」と述べている¹⁹。南京で商売している陳姓の徽商は「凡そ金石古文、名家の法帖（習字手本）、模写指画（指で書いた絵）については、努めてその真を得、習わざるところは無く、絵画は唐より元まで、名品は宗教器から玩物まで、百金の価、什襲の珍（幾重に包装され大切に所蔵されたもの）を論ずる無く、購わざる所無」²⁰。さらに休寧商の呉用良については、「彼は呉・会稽に出入りし、諸名家と遊び、古凶画・尊彝（礼器）を購わないものはなく、一旦意に当れば什倍（の価格のもの）でも購う」²¹。万暦年間の袁宏道の徽商に対する総体的な見方は、「徽人は近ごろ益々斌斌として、繒を数え（錢を勘定し）、籌を料る（計算する）者がついに習って詩歌を為り、能わざる者は亦喜んで凶書及び諸玩好を蓄え、画苑の書家多く観る可きものあり。独り矜しむ習うも未だ除されず（官位に就かれず）、楽しんで道訟（訴訟）をするが、言い窮るを愧じ、これが余の結（論）たるのみ」²²。明代商人呉其貞は『書画記』中で、「昔我が徽（州）の盛んなること、休・歙二県に如くものなし。而して雅か俗かの分かれめは古玩の有無にあり、故に重値を惜しまず争い之を収めんとす。時に四方で玩を貨するもの（売るもの）は、風を聞いて奔り至る。外で行商するものも捜し尋ねて帰り、此れに依り時に甚だ多きを得る。その風は汪司馬兄弟より開かれ、濮南の呉氏に行き、睦坊の汪氏に従って之を継がれる。余の郷の商山の呉氏、休邑の朱氏、居安の黄氏、榆林の程氏、得るをもって皆、海内の名器と為す」。

古玩（骨董品）の有無をもって雅俗かどうかを推し量ることから、徽商の收藏の風潮が最も盛んになった理由がわかる。この種の事例は枚挙に遑ないと言える。既往の論者の多くは商人のこの種の行為を風雅に付随し、間口（見かけ）を飾るものである認識していた。これは商人特有の眼力を見くぶり、また商人の商品意識及び経営能力を過小評価していると言わざるを得ない。商人が書画文物を購入するのは、自ら風雅の振りをしながらその価値を保ち、増殖するためであり、文化的投資を行う者は乏しくなかった。明後期、歙商の呉用卿は兄と「俱に京師にゆき、金錢籠から錢をありつたけ出して書画・鼎彝の類と換え、鑑識は明敏であるため、贋作を売りつけることはできず、好事家はこれを見て、重ねて購買することを惜しまず、収入は支出と比べたら十、百、千、万倍となった」²³⁾。書画文物を経営し、眼力を備えた者は、その利潤は極めて豊富であった。この方法は京城で用いられ、江南でも常に用いられた。また徽州人の郭次父という者は焦山に住み、「蓄えた器玩書画は甚だ精宝であり、拱璧（大きな玉）のみならず価を待って沽り（相場が上がるのを待って売り）、以て高利を射す（得た）」²⁴⁾。こうして見ると、書画を経営し高利を得るものは多くいたのであった。

嘉興秀水の人李日華は、官は大僕寺少卿にまでなったが、政治から退き家に20余年居り、書画を専らにし、鑑賞に優れ、常に書画・骨董商人と交際していたことは、その日記から分かるところであり、徽州等の土地の商人は常に彼に書画を売りつけていた。李日華は名家の書画をうわべだけ慕って心服していない歙商が常に偽作をつかまされていたと言ひ、また李府（李日華）に売ろうとされた書画の多くもまた贋作か偽物であったと言われるが、しかし李日華の鑑定を経れば其の中には真に価値のある名作や宝物が少なくなかった。歙商を中心とする各地商人が書画を收藏することによって、これを利殖のための商業経営としたことは明らかであった。咸豊・同治時期の歙の人、黄崇惺は「休、歙の名族、即ち程氏銅鼓齋、鮑氏安素軒、汪氏函星研齋、程氏尋樂草堂は皆百年も続いた巨室であり、宋元の書籍、法帖（法則とすべき習字

の手本）、名墨、佳硯、奇香、珍葉と大尊彝（古の礼器）、圭璧、盆盎の類を多く蓄えてあり、一物が出るたびに、歴代の鑑賞家によって口々に褒め称えられた。」と述べている²⁵⁾。百年を経た物は久しい間にますます貴くなったが、これは決して風雅に付随した結果ではなく、徽商の眼識が無視できないものであったということである。

明後期より、各地域の商人は忙しく奔走し、大いに活躍し、書画市場もまた極めて賑やかとなった。自分自身とても收藏を好んでいた太倉の人王世貞は「書はまさに宋を重んじ、而るに三十年来、元人を重んずるを忽せにし、乃ち倪元鎮もって明沈周におよぶに至り、価は驟かに十倍に増す。窯器は哥・汝を重んじ、而るに十五年来、宣徳および永楽、成化に至るまで重んずるを忽せにし、価は驟かに十倍に増す。大抵、呉人の濫觴にして、而して徽人これを導きしは、ともに怪しむべき也。今、我が呉中の陸子剛の玉を治め、王小溪の瑪瑙を治め、鮑天成の犀を治め、朱碧山の銅を治め、趙良璧の錫を治め、馬勳の扇を治め、周治の商嵌を治め、及び歙の呂愛山の金を治め、王小溪の瑪瑙を治め、蔣抱雲の銅を治めるはみな常価に比べ再倍し、而して其の人は縉紳と坐をともしする者もあり」と感慨深く述べている²⁶⁾。芸術品の価格は暴騰したが、その理由を尋ねると、呉人に始まり、徽人が引き継いだということである。徽人が引き継いだことは実際のところ決して怪しむべきことではなく、彼等はよくみているところは鑑賞の風潮が起った後の潜在市場であった。王世貞の死後、江南の芸術品市場はさらに盛んとなった。万暦中期の袁宏道が即ち指摘しているように、当時、細かな技術で著名なものはいずれも呉の人であり、龔春・時大彬の瓦瓶、胡四の銅爐、何得之の扇面、趙良璧の錫器、これらの商品は優れ価格は高く、「一時、好事家は争って之を購ひ、及ばざることを恐れるが如し。其の事は皆、呉中より始まり、猥子（凡人）転相售受し、富人公子を欺き動もすれば重資に至る。士大夫間に浸淫し、遂に以て風と成す」²⁷⁾。ただ、官僚・士大夫に賞玩の風潮が起りさえすれば、工芸品市場は必然的にあちらこちらでその「狼煙」があがった。万暦時期の沈徳符は、書

画骨董相場の持続的な市価上昇は「一二の雅人が、賞識摩挲（良さを知り愛撫）することよりはじまり、江南好事の縉紳に濫觴し、新安の耳食（聞きかじり）に波靡（ひろがり）した。諸大賈（商人）が千（両）といい、百（両）といい、動もすれば囊を傾け相酬い、真贋また辨ず可からず。」²⁸⁾と言った。工芸品の鑑賞はもともと難しい事であり、江南縉紳がお互いに相倣い、風雅に付き戯れ、新安大商人は市場を見極め、投資の新たな道を開き、工芸品を買収し、販売する過程で、生産者とともに特に江南縉紳に鼓吹し、価格を高め、多方面で騒ぎたて、芸術品市場を操縦、統制した。江南工芸品市場の形成は、工芸品相場の不断の上昇、江南縉紳と新安大商人のいずれもが有力な推進力であった。味わえば味わうほど価値が出たのは、呉人が濫觴であり、徽商が引き継いだ。工芸品市場において、最も活躍したのは徽州商人であり、収蔵に奔走したのは江南士大夫たちであり、最も利益を得たのはおそらくは徽州商人であったであろう。

二 戯曲文化の推進

明清時期の江南は極めて著名な戯曲の中心であり、康熙時期蘇州の人沈朝初の『江南を憶ふ』詞の言うところの「蘇州は好む、戯曲で宮商を協づ」である。その時期の江南は先ず、海塩腔（曲調）・昆山腔・弋陽腔の三曲が流行し、後には昆曲独り秀でて、清中期以後各種地方戯は珍しさを争い、艶かしさを競った。李伶・馬伶等著名な俳優は群星のようにきらめき輝き、魏良輔・梁辰魚・沈璟等の劇作家が輩出した。嘉靖時期、南京の著名な戯劇俳優は数十人の多きに達した。万暦年間、蘇州の職業昆曲戯班（芝居一座）には「瑞霞班」と「呉徽州班」があった。そして各地方官僚の家庭昆班も多くあった。昆山の人魏良輔が昆劇を改革して曼声（声を長く引っ張って歌う）を創り、梁辰魚が艶曲の新声を作ってから、明末清初、蘇州城中では「古調は作らず、竟いに新声と爲り、竹肉相間し（笙笛と肉声がかわるがわるおこり）、音は絲より発する若し」であった²⁹⁾。康熙時期、蘇州のみで

戯班は千の多きを数え、その中の寒香・凝碧・妙観・雅存の四大戯班が最も有名であったということである。雍正・乾隆時期、蘇州の「城内城外では、遍く戯園が開かれ、戯劇が演出され、「昼夜絶えなかった」³⁰⁾。乾隆中期、蘇州の集秀・合秀・擷秀の諸班は最も名声がある昆曲戯班であった³¹⁾。乾隆中後期、蘇州には70余りの戯班が集中し、各地よりやって来た戯班には湖広小班局・杭州瑞寧局・浙江宝華班・河南局・清江浦松秀班・山東局・上海局・台湾局・無錫聚華班・湖広局・鎮江松秀班・王蘊山湖州府班・胶州局・張秀芳山西局・維揚老江班・維揚大安店老張班・維揚院憲内班・維揚小洪班・維揚広徳太平班・維揚老江班・京局・儀徴張府班・南京慶豊班・上海池州局・邳州署内・天津衛・朱耀章福建局・朱耀章小班済南局・天津小班等30前後あり³²⁾、地域も10余省に達していた。

これらの戯班は江南で活躍し、商人の招請・賛助・最賈によって非常に大きな力を得た。また商人が商談のためお得意先を招待したり、官僚を接待したり、士民と親密に交際したり、あるいは名誉を得、名声を大きくするために戯班を招聘して演劇させることは重要な手段であった。一つの社会階層となり、おそらく商人による戯班の招聘ではきわだっていたであろう。嘉靖時期、南京の戯班は数十あったが、最も著名なものは「興化部」と「華林部」であった。徽商は「両部を合わせて大会を爲し」、広く金陵の貴客文人を招き、それとともに妖婦や淑女が集まらないことはなかった。「興化部」と「華林部」を東西に列を分けて、同時に『鳴鳳』劇を演奏させた。実際には大金を用い、両戯班を招聘し、彼等に互に競い合わせて、上下に分けた。その結果、「興化部」の技術は及ばず、「華林部」がとりわけ優れていた。「興化部」の主役馬伶は失敗に不満であり、宰相嚴嵩の配役を好演するために、特に都に行き嚴嵩と相匹敵する別の宰相のもとに身を寄せ、その言動を観察し、言語（ものの言い方）を習得した。三年後、南京に帰り、徽商に願って再び戯宴を開き、前回大会の賓客を招いてもらい、「華林部」と、再び『鳴鳳』劇を演奏し、模倣が巧妙で内容が詳細で深い技芸を行い、終に「華林部」に勝った³³⁾。二大戯班の前後二回の競争演奏は結局、徽商の画策と賛

助によるものであった。嘉靖時期江南で経営する歙商の潘周南・召南兄弟は非常に戯曲を好み、絲竹高会（器楽演奏会）を開き、召南の子之恒は父等の資本をもち、江南の重要な戯曲活動はすべて自らその事に関係し、「秦淮従り曲宴の会を聯ねること凡そ六七挙なり」であった³⁴⁾。商人の画策と賛助は戯班が著名度を高める重要な条件であり、俳優の演技水準の向上を促進したことは少しの疑いもなかった。清代、商人は資金でもって戯班を招聘し演奏させることは常事であった。乾隆時期、蘇州の大商人が集秀班と賓客を招聘した。この集秀班は、乾隆帝六十歳の誕生日に蘇州の織造と両淮塩使が蘇州の名優金徳輝に任せて蘇州・杭州・揚州三府より数百の戯班から選出した名優を集めて作られたものだった。原名は集成班といい、俳優は図抜けているから、集秀班とも名づけられた³⁵⁾。乾隆年間、揚州「七大内班」中の老徐班、老張班、大洪班、德音班等はいずれも商人より組織されたものであり、俳優の大多数は蘇州等の地より来た名優であった。商人が著名な戯班の組織化に、不可欠の作用を果たしたことは明らかである。江南各地の迎神賽会の活動時に至っては商人が演技の活発な江南城郷の大小戯班に出資し生計の道と発展の機会を提供した。

江南戯曲班はやはり商人に招聘され外地で演技した。昆曲は明後期の改革で一新してからは、全国各地に流行し、南昆・北昆の二大支派が形成され、そして又「四方で歌う者は必ず呉門を宗んだ」³⁶⁾という状況が現われ、これは各地の商人の種々なる活動と大いに関係があった。蘇州の名優は端午の節句後に夏季休業の習慣があり、清江浦の大典商汪己山は「則ち重賞を以て之を迂え来り、留まりて八月始めに至り帰った」³⁷⁾。江南昆曲は全国各地で上演されたが、商人が大いに力を出していたことがわかる。張雨林の調査検証によると、「江南鴻福班」と「全福班」はまたかつて何度も山西に遠征し、「晋昆」の発展を促進した。山西洪洞県上張村の戲台（舞台）上に、すなわち「道光七年天下に名を馳せた江南全福班此に在り」という壁に書かれた文字がのこっている³⁸⁾。もし山西商人の後押しと資金援助がなければ蘇州の昆曲戯班が千里も遠しとせず山西へ来て上演したであろうか、実に不可

思議な事である。

蘇州の戯園はまた商家会館を利用する宴客（の要望）によって生みだされたもので、元来、蘇州の大衆戯曲は揺れ動く水上の卷梢船（まきかじ船）上で上演されたものであり、後に岸辺の固定し広々とした戯園に移った。乾隆『長洲県志』卷十「風俗」では「蘇州戯園は、向には未だあらず、間々或は之有るも、商家会館の以て宴客のために借りるに過ぎざるのみ、今城内城外を論ぜず、遍く戯園を開く」と述べられている。戯園での演技を唱導した者はまさに商人であることがわかる。乾隆三十二年、江蘇布政使胡文伯が戯園を禁じたが、「商賈乃ち会館に假りて以て演劇した」³⁹⁾。戯園での平常の演技の出資者は商人であったと説明している。乾隆末嘉慶初、「蓋し金、閩の戯園は十余処を下らず、居人に宴会有らば、皆戯園に入り、客の便に待し、牲を撃ち鮮を烹、賓朋座に満つ」⁴⁰⁾。

「金、閩の商賈雲集し、宴会時無く、戯館数十処、毎日演劇す」⁴¹⁾。金、閩一帯は蘇州で最も繁華な商業区であり、「鵲舫（白鳥船）の笙歌、翠娥（美女）を載せ、楼台の随処に笙歌沸き」⁴²⁾、各地の商人がそこに雲集した。戯館もまたそこに集中し、明らかに戯館は商人の需要により開設されたものであり、利用する者も主に商人であり、戯館は商人の需要から生まれ、増加し、繁栄したものであったことを表している。江南戯曲の上演は、明末清初は家班（家所属の戯班）に限られ、清前期に戯館戯園に変化発展し、商人はその発展過程の重要な推進力であった。

商人は劇団を招聘・資金援助して演出させるだけでなく、各地商人の大多数は会館内に舞台を築き、各種の地方劇を上演した。江南都市の各地域の多くの商人の会館では舞台を建て各種の地方劇を演出した。上海の福建・広東商人が建てた天妃宮では「海船滬に抵たり、例として必ず牲を折り演戯す」⁴³⁾。外地商人会館が建立した舞台は蘇州の潮州会館の舞台が最も格式が高かった。戯楼（劇場）は北に坐して南に向き、山頂二層の重楼をあらわしていた。屋根の頂には色彩のついた陶片で双頭の竜が珠を奪う像が嵌められ、額縁には精美な竜頭が彫刻され、漆の色が艶麗である。整座の舞台には一本の柱もなく、左右の傍らには精美な彫刻が施された二

本の半円柱が吊り下げられている。舞台の楔部は傘型吊り掛け式となっており、数千本の変形とがたで構成され、樺（ほぞ）を組み合わせて凹凸面をなし、きわだった構造となっており、多様な花紋があり、金や黒味を帯びた緑色が塗られている⁴⁴⁾。光緒五年蘇州相門内の改修された中張家巷の全晋会館には二層の戲楼（劇場）があり、楼上の舞台は凸字型を呈し北に向って伸び、三方空に面している。台の頂はドーム状の天井で、四周は630個の木組みが嵌められ、樺（ほぞ）あわせされており、18重の螺旋がある。突出した「陽馬（屋根の四隅に出て短い椽を承けるもの）」には324個の黒色の蝙蝠と306個金色の雲が彫刻されており、二つずつ交じり、大紅底色で塗られ、金色や赤青色のきらびやかで、いかにも富貴・華美な宮殿建築のように見える。台の後ろには広々とした戲房（楽屋）があり、今に至るまでなお保存されている衣装箱にはくっきりと人目につくように「姑蘇全福班」の文字が書かれている。戲房の両翼には各々七間看楼（物見台）が延びている。戲台（舞台）中央に「普天同慶（天下一同の慶び）」の扁額が高く掲げられている。両辺の円柱に「我を見るに我に非ず、我、我を見るに、我也我に非ず、誰かを妝い誰かの像であり、誰かが誰かを妝い、誰かは就ち誰かの像である」という対聯（対句）と大殿の「曲は是れ曲也、曲人情を尽くし、愈よ曲にして愈よ妙なり、其の戲を戯す乎、戯は物の理を推し、越す戯して越す真なり」という門聯が相呼応し、哲学的道理を充満させ、人々に久しく遙かかなたを思いやらせている。宣統元年に創建された上海三山会館は正殿と相對しているのは一座の木組みの戲台（舞台）であり、戲台の秀麗さが抜きん出ており、彫刻飾りも精美であった。台前の石柱には、「古今の大観を集め、時事異なると雖も、管弦により、楽しい趣きの情と文が相生ず」との対聯が彫刻されている。春秋のよい時期、あるいは重陽の節句（9月9日）に商人は地域会館の戲台で故郷戲を上演し神を祭って祈り、人情義理を叙べ、いささかなりとも郷愁を慰め、凝集力と向心力を増加させた。乾隆時期の人陳宗炎は佛山「会館の演劇は在在皆然り、演劇して千百人聚觀し、亦時時皆然り」⁴⁵⁾と述べている。この種の状況は江南の

都市を描写するのに完全にあっている。外地商人が会館中で故郷戲を上演し、江南市民が千人・百人と集まり觀覽し、江南市民の生活文化の影響を捨て去っているが、この各地戯劇文化の江南戯曲に対する衝撃的影響については検討しなければならない。

昆曲が流行してから乾隆中期に至って、二百年間、江南文化市場における戯曲の上演は純粹な昆曲であり、また全国に影響を与え、「四方で歌う者は必ず吳門を宗んだ」ようである。しかし、昆曲の背景セットは簡単であり、飾りつけも簡素であり、一つの机に一脚の椅子、笛は静かな音をだし、文字はごつごつして読みにくく、吳人のやわらかな言葉を発し、曲調はゆったりとして穏やかであり、故事では多く忠、孝を説き、情節（物語の筋）では才子、あるいは佳人が相半ばし、貴族没落後の花園、黄金の扁額に大団円と題名した常套の手法であり、これらの情節が、文化水準の余り高くない商人に対して語られているが、（彼等は）聞いても解らず、学んでも学び得ない、その思想の意趣・芸術の表現は社会大衆と日増しに食い違ってきていた。これを昆曲のこの種の雅部である秦腔・弋陽腔・梆子腔・羅羅腔・二簧調と比べてみると、弦楽器がこのように乱弾される花部が華北・華中・江淮大地で上演されることが広汎に流行し、その音調の多くは声はげしく高かぶり、拍子木でリズムをとるが、そのリズムは鮮明であり、歌詞も整い、衣装は艶麗で花のように美しく、場面も多くまた広くて大きく、音楽の拍子木の一起一落の法、銅鑼や太鼓の音、歌の調子は柄杓を打つ動作で補われ、銅鑼をならし太鼓を打ち、様々な音が奏でられ、雰囲気は喧騒と情熱に満ち、物語の筋は一般人民の日常生活をとても反映し、自然と日増しに人々、特に社会大衆の歓迎を受けるに至った。嘉慶・道光時期の錢泳は、自分の幼い頃昆曲中第一部と称されていた集秀・合秀・擷芳の諸班はその当時絶大な影響力が長らく続いていたが、民間は『金釵（金のかんざし）』・『琵琶』の諸本を老戯と称し、乱弾・灘王・小調を新腔とし、多くは娘役を加え、洒落をまじえ、衣装を多くそろえた。さらにお面を添え、まさに新奇と称し、觀客は益々多くなった。老戯の上演の如きは人々がまばらで

あった」⁴⁶⁾と述べているが、当時の状況を反映していた。その当時の京師はさらに甚だしく、「昆曲を唱う時、観る者は輒ち外にでて小遣(小便)をし」、昆曲は「車前子(おおばこ)」⁴⁷⁾と誇られた。外地の戯曲は伝統的昆曲戯市場を奪い取り、昆曲市場が次第に寂れる状況を引き起こす中、蘇州の19の昆曲戯班が嘉慶三年に、突然、朝廷に一諭旨の頒布を申請した。その諭旨は、乱弾などの腔調は「秦(陝西)・皖(安徽)から起ったと雖も、而して各処に輾転流伝し、竟に相倣效す。即ち蘇州・揚州、さきに昆腔を習い近ごろは旧を厭い新を喜び、皆乱弾等の腔を以て新奇の喜ぶ可しと為し、転じて將に昆腔を素より習うを抛棄せんとす。流風日に下り、厳しく禁止を行う可からず。嗣後、昆・弋両腔を除き、仍ち旧に照らし其の演唱を准し、其の外の乱弾椰子・弦素・秦腔等戯は、概して再び唱演を行うを准さず。」と述べていた。蘇州織造府はそのうわさを聞いて動き出し、調査禁止後、蘇州で流行している乱弾等の戯は「俱に外来の班の演ずる所」⁴⁸⁾と認定した。禁令中で話が及んでいるこれら外地の地方戯は明末清初に流行し始めた。しかし、各地商人の賛助と推薦がなければ、それらは交流範囲が決して広くない呉語区内に足をしっかり据え、そして日々発展し、伝等的昆曲から上演市場を争奪するようになるとは決して考えられなかった。誇張せずに言えば、江南都市の戯班は乱立し、各種の脚本は精彩且つ華やかであり、各地の戯曲の交流、合同公演は奇を衒い艶を競い、戯曲文化の光彩は目を奪うばかりであり、まさに外地商人が会館の内外で大いに演出の推進を賛助・持続させてきたのであった。

三 营造地域文化

明清時期、各地商人は江南に多くの会館を建立したが、これは前代には無かったことである。これらの会館は構造が凝っており、形式が精美であり、いわゆる「其の各省大賈、自ら居停を為し(寄寓し)、亦〈会館〉といい、壯麗の觀を極めた」⁴⁹⁾のである。会館自身がすなわち有形の文化であり、また異なる程度で異なる地域建

築文化を反映していた。南京評事街の江西会館は、「大門外の花門楼一座、皆陶で以て砌成され(積み重ねられ)、尤も壯麗為り」⁵⁰⁾。呉江盛沢鎮の濟寧商人の会館の金龍四大王廟はさらに地域商人の文化的特色を反映していた。該廟は康熙六十年に建てられ、呉江の人陳王謨はその建築形式が北方様式であることに留意し、「其の廟制は、一に北地祠宇に倣い、凡そ斧斤(材木を切る)・聖墁(壁土を塗る)も悉く北を用い、故に其の規模は迥別し(他とははるかに異なり)、眼界聿新し(視界が一新し)、尋常の諸廟の得て倫比する所の者に非ざるあり(比べることのできないものであった)」⁵¹⁾と感慨深げに述べている。典型的な故郷の風格をもった館宇(やかた)を建てるために、濟寧商人は泥水木匠から雕漆匠にいたるまですべて故郷の人を用いた。もし各地の地域商人が、いずれも濟寧商人と同じであれば、会館は故郷の特色をもった建築物だった。それ故に清代江南各地の外地商人が建築した大小220余ヶ所の会館は江南の建築群中に散りばめられ、非常に注目され、また渾然一体となっていた。清代江南の建築文化はすでに全国各地の影響を受け、また多くの各地の建築特色を吸収・包容し、徽派造形・浙東風格・閩粵様式が江南都市中の至る所で見られると言えよう。

各地の商人団体は江南に所在する会館において、江南の自然条件を十分利用し、江南人の土地を選び建築する理念を吸収していた。清代江南の建築は明代に比較して、園林化の傾向がさらに際立っていた。各地商人の会館はすなわち各地の山水風物の趣きが人に好感を与え、独特の造形が、遊覧に資すべき園林の構造となっていると言えよう。蘇州の漳州天后宮の場合は、中に大殿があり、前に大門があり、後に両堂が置かれ、堂上は楼となっている。高いところからの眺めは立派で広々としており、楼の後院及び東偏はいずれも亭榭(物見台)陂池(ため池)の景勝があり、散策する者の遊覧に供していた⁵²⁾。蘇州の三山会館天后宮は、「中に陂地亭館の美、岩洞花木の奇あり、呉中の名勝為り」⁵³⁾。

蘇州の邵武会館天后宮は、「殿前に觀台(眺望台)を構立し、回廊を分翼し、殿後は輔けるに楼を以てし、楼の下は郷人の進講燕集の所と為

り、亭軒樹石は、左右を映し帯び……結構は精緻にして、規模は壯麗なり」⁵⁴。蘇州の延建会館天后宮は、「宮殿は崇宏にして、垣廡（垣根廊下）が周衛し、金碧絢爛、傍ら齋房・別館に及び、花石を羅致し、器用具備す」⁵⁵。盛沢鎮の濟寧会館大王廟は、「前に三門が辟き、又旁に甲門を開き、石径を築きてこれに達し、便を取る也。夫の崇ぶべきは其の中に台あり、峙して其の左右に樓あり、敞きは其の前に軒あるが若し。其れ、偏らには堂五楹を為り、軒三楹を為り、池を疏り石を疊み、亭有りて翼然とし、岩洞幽邃たり。其の東偏は則ち高樓、樓は極めて宏敞壯麗にして、庭中に嘉木を列植す。毎春秋の佳日に、花卉映え発し、高樓に升起、遠くの山を望めば、白雲繚り繞り、湖波淡く洩れ、飛ぶ鴻滅没し、漁歌款乃（舟歌）、皆廟中で慨するに勝ふる也」⁵⁶。中張家巷の全晋会館は、大殿の右側に陂地（ため池）假山（築山）が備わっている花園であった。このような美しい建築物、風景のよい場所は江南園林を更に精巧且つ特別の趣きを与え、人々を遊樂に耽り家に帰るのを忘れさせ、江南園林の数量は更に多くなって、指で数えられないほどになり、江南園林文化にさらに異彩を加え、奥深しさはきわまりないようである。商人会館はまさに江南園林史の中で一つの地位を占めていた。

各地の地域商人集団の会館は、大多数の所在地は江南都市の繁華の市街区にあった。蘇州会館が最も多く、主に胥門より閶門の間の商業黄金地区の南濠街と七里山塘街に集中していた。嘉慶・道光時期の人顧禄は、「吳城五方雜処（四方八方から集まってきた各種の人々が雑居し）、人煙稠密（人家が密集し）、貿易の盛んにして、天下に甲たり。他省の商賈が各々関帝祠を城西に建て、主客が規条を公議する所と為し、棟宇壯麗にして、号して会館と為す」⁵⁷と述べている。南京の外地商人の会館は主に西は水西門より、北は内橋まで、南は聚宝門の南京城西南角に至るまでに分布し、ここは商業が最も繁盛している地区だった。江東門外は長江を上る貨物の集中するところであり、会館もまたいくつかあった。杭州の外地商人の会館は主に西湖西の吳山周辺の商業中心に分布していた。上海の外地商人の会館は主に十六鋪・大小東門と老城內

外の洋行街の咸瓜弄・棋盤街・董家渡・斜橋及び城隍廟一帶に分布し、会館密集の会館街を形成し、東・南・西三方の城牆外にもまた分布していた。江南都市のこれらの外地商人の会館は、その地は繁華街の入り口或は交通の要衝にあり、各地商人の活動に便利であると同時に、江南都市の濃厚で活気に満ちた商業文化の息吹を顕現していた。

明清の地域商人集団の神靈崇拜は単一神から衆神合祀にいたるまでの発展変化を経て、関聖天妃、財神土神、郷賢名宦、釈祖先達は、いずれも崇拜の対象となり、各地域の商人集団の多方面の要求を反映していた⁵⁸。盛沢鎮の徽寧会館は正殿が三間、中央に威顯仁勇協天大帝を供え、東に忠烈王汪公大帝を供え、西に東平王張公大帝を供えている。殿の東には行宮があり、紫陽徽国宋文公を供え奉っている⁵⁹。蘇州の潮州会館は、関聖帝君・天后聖母・觀音大士を敬い祀り、後にまた東西房屋を買い、別に昌黎韓愈を祀っている⁶⁰。上海の豫章会館は、正殿で許真君を供え奉り、旁殿では五路財神を供え奉り、庁樓では文昌帝君など諸多の神像を供え奉っている⁶¹。上海の潮惠会館は、前に天妃を祀り、後堂樓上に関帝を祀り、その左右に財星と双忠を供え奉っている⁶²。上述の商船会館（上海の潮惠会館？）は元來天妃を祀っているのでみであったが、乾隆二十九年、南北二庁を重修し、北庁では福山太尉褚大神を祀り、南庁では成山驃騎將軍を祀っている⁶³。各地の商人集団が崇め祀る主神と附神の各種神靈は、それ自身地域文化の体现であり、各地の民俗文化を代表し、また江南地方神の様相をさらに衆多なものとし、或は某かの神靈の崇拜を更に普遍化させた。天妃は福建莆田の人林默娘であり、廣東・福建及び海遠商人が崇拜信仰している。許真君は、山西旌陽県令許遜であり、江西商人が崇め奉っている。金龍四大王は宋末殉節の士であり、伝説では河運を庇護したと言われる諸生謝緒であり、淮・揚・濟・泗の地域の人々が崇め奉っており、康熙末年吳江盛沢鎮の山東濟寧商人が金龍四大王廟を建立した後、吳江でようやくこの信仰がはじまった。韓愈は唐代の文豪であり、元々廣東潮州商人によって崇め祀られていた。列王大帝は、隋時代歙・宣・杭・睦・婺・饒の

六州を保有した汪華のことであり、呉王と称されたり、また越国公と称されたりして、元々徽商に崇め祀られていた。南宋の大儒朱熹は、元来主に徽商に崇め祀られていた。これらの郷土神は現在の江南では何処でも程度は異なるが信仰崇拝されている。その理由を尋ねると、皆各地商人の崇拝と関係しており、潜在的に感化を及ぼし、その美風が伝わり、江南各地に波及し、一般人民に浸透していった。各地の地方神は、形象は異なり、寓意（仮託）も一つではないが、しかし、江南社会は何処でも程度は異なるものの見られ、江南の神祇崇拝はその全部が受け入れられ、全国各地の地方神は均しく相応の位置を有し、商人の活動は疑いもなく重要な要素となっていた。

各地の商人集団は江南では直接に各種の民俗活動に従事し、民俗文化を弘揚し、南京では、毎年正月に灯会（戸ごとに灯をつける祭）を挙行する習俗があり、徽商特に徽州木商が引き受ける灯会は最も立派であり、「奇を矜り（ほこり）、勝を斗い（きそい）、城市を周遊する毎に、観る者咸な盛んに徽州灯と称す」⁶³。同治末光緒初、経済が衰退していたが、江西商人集団が挙行する正月灯会はなお灯火を燦燦と燃やしていた。毎年四月上旬、徽商が都天会灯会を主催し、賽会（多数の人が集合して儀仗雑戯を設け、神を迎え祭祀をする）を三日行い、展覧する花灯（花の装飾をした灯）、「旗幟・繖蓋（衣笠）・人物・花卉・鱗花（連なった花）の属は、紙を剪って之を為り、五色十光、極めて奇巧を備え、合城の士・庶往きて観、車馬填闐し、灯火は旦に達す」⁶⁵。江南の内容豊かな民俗文化は少なからず各地の商人集団の活動に依頼して伝承・発展することができたのである。

江南各地では、およそ節日や四季の折節、神霊の生誕日、民間の祝賀式典、迎神賽会は断えず、大衆文化の重要な内容となっていた。迎神賽会の風習は清中期にとりわけ盛んとなった。江南全域の場合は、乾隆時期、神の生誕日にあたるごとに、「灯で彩られた劇が演じられ、……技巧と百戯（種々の雑戯）がおこなわれ、清歌も十番あり、輪流叠進す（代わる代わる繰り返された）……閣を上げて雑劇し、極力装扮された。今日某かの神出游すれば、明日某かの廟で

勝会し（宴会が行われ）、男女奔り赴く。数十百里の内、人人狂うが若し」⁶⁶。蘇州各地の場合は、「好んで迎神賽会を為し、春時、台を搭て演戯し、遍く郷城に及ぶ」⁶⁷。松江各地の場合は、春の月になるたびに、「遍き処（各地）で木を架け台を為り演戯し、名づけて神戯と曰う」⁶⁸。常州府の場合は、五月二十八日の郡の城隍誕生日に、「演戯して祭を為す」⁶⁹。杭州の場合は、清中期、「城中で毎日是れ台戯にあらざれば、即ち是れ堂戯なり。每年中、各廟の神聖の誕は間断有ること無く、迎神賽会も奇しくも出ざること無し」⁷⁰。嘉定県の場合は、「春秋二季の迎神賽会は、演戯して灯を出し、幾も虚日無し」⁷¹。迎神賽会には必ず演戯が行われた。演戯に必要なものは地方社会が募集分担する外、大半は商人の賛助から出されていた。江蘇・浙江交界の楓涇鎮は著名な棉布加工地であり、「商賈衆積す。毎上巳（桃の節句）、迎神最も盛んにして、高台を築き、梨園数部を邀え、歌舞が旦に達す（早朝まで行われた）。神は是れ楽しまざるに非ざる也と曰う。」⁷²。無錫の城隍誕神賽会は、賑やかさが非凡であり、思うに「北塘商賈の集まる所に由り、錢を出すこと易しき也」⁷³。もともと江南迎神賽会の演戯活動がこのように興隆し盛んになった理由は商人が群がり集まることと、資金を措置し易いことが大きく関係していた。

迎神賽会はもともと社区（祭祀区）の居民が春秋に祈り報いる禱神穰災（神に祈りお祓いをする）の活動であり、商人がこれに熱心になり、また商品経済が発達した地区で最も盛んとなり、功利的色彩がさらに濃厚になった。一回迎神賽会を行うごとに、活動自体で消費する商品、会に赴く者が消費する物品、購買する商品及び必要な交通手段等、その価値は十分見るべきものがあり、商人は自然とこれらの機会を利用して商品販売を促進することができた。従って、一回迎神賽会を行うことは、実際には有利に企図できる商業機会でもあった。甚だしきに至ると迎神賽会は規模が大きくなり、回数も増え、開催日も長くなり、商人があらゆる方法で断続的に作り出す商業機会となったかもしれない。所謂「神は是れ楽しまざるに非らず」とは、利を追求する商人が営業を求めるために作り出した

口実であった可能性が高い。所謂「好事者は利する所有れば歳時牽率す（関わりあった）」であり⁷⁴、迎神賽会活動の挙行者が真に用意しているものであると述べられている。所謂迎神賽会の時は「市肆の貿易は較べれば盛んにして、郷間の蓋蔵（貯蔵）は較べれば細まる」⁷⁵。まさに商人が希求した結果である。乾隆時期広州の人陳宗が当地の「商賈神に媚び以て利を希い、迎神虚日無し」⁷⁶と言っているが、江南の状況は完全に相似している。明らかに、商人は迎神賽会の積極的な画策者であり、また大いなる支持者でもあった。江南迎神賽会が大衆習俗に迎合し、日一日と盛んになる迎神賽会はまた商人に更に多くの商業機会と見るべき商業利潤を創造した。まぎれもなく、迎神賽会は商人の参与により、回数も頻繁となり、形式も多様となり、評判や規模は拡大し、内容も豊富多彩となり、地域社会と民衆の日常生活に対する影響は更に深まった。

商人は儒家の仁義を標榜し、良賈・義賈の様相を樹立しようと企図し、従って地方の廟宇寺観などの宗教文化施設はすべて、常に多くの外地商人の影響があり、多くの寺観の建造、修復及び神仏の維持費は商人の出資か賛助によるものであった。万暦初年、烏青鎮で改修された広福教寿聖塔において多額の資金を寄付したのは徽商の呉文明・呉文昭・程憲欽・孫懋忠・許仁輔・朱四徳・汪湘等の人であり、郷紳李樂はまたこれらの人々のために官府に陳情文を出して表彰することを求めた⁷⁷。上海の有名な静安寺は、乾隆初年に歙の人孫思望によって「銭を出醜して重修」された。百数十年をへた光緒初年、またおもに寧波商人によって資金を集めて改修され、高名盛大な徽州本籍の絲・茶商胡雪岩が多額の資金を寄付して500両つくり、南北の多くの金融業者も銀200両を寄付した⁷⁸。康熙三十六年、上海で城隍廟を改修したとき、寄付金を出した寧波商人・宣州商人及び布商・沙船商・洋貨商人は少なくなかった⁷⁹。雍正十年、上海県における音楽奏者への給料・食糧の寄付においては、塩業の衆商からの寄付金が最も多かった⁸⁰。道光二十六年、上海で城隍廟三聖閣が建造されたが、福建興・泉・漳・永の衆商、広東の揭・普・豊・潮陽県の衆商、山東の膠西帮・

菜帮・乳帮・濰陽帮・胶帽・泊帮・両帮の衆商、蘇北青口の衆商、山東商等が続々と資金を寄付した⁸¹。盛沢鎮の南京商人が信奉する三叉殿は、「即ち山右（山西）諸商、亦匾を樹て拈香し、歳時瞻仰せざるは無き也」、康熙四十五年改修され、「合鎮の士商と金陵の諸護法（仏の正法を擁護するもの）、各々捐資樂助す（寄付金を出し力添えした）」⁸²。

江南の非常に多くの地方慈善公益施設は外地商人の寄付金或は賛助により建立されたものである。乾隆十三年、蘇州閶門外の渡僧橋が改修されたが、義拳を提唱し寄付金を出したのは程璋など8人の布商であり、その中で安徽休寧の商人が6人、江寧上元商人が1人、山東章邱商人が1人、また工費と材料を管理する2人の商人もまた休寧の人であった⁸³。嘉慶二年、蘇州の城河再浚渫では、「郡中の紳士商民、金を輸し麩り至り（群がり集まり）、畚挿（工事）継き興り」⁸⁴、商人もまた力を出した主要な力量であった。乾隆末年、杭州紳士が蘇州の彭氏にならって恤嫠会（寡婦援助会）作ることを企図したが、経費に苦しみ、成功しなかった。二年過ぎて、塩政の名目によって、一塩引を銀四厘の比率に換算して金を納め、ようやく依願通り返済できた。杭州城内におけるその他の慈善施設の普濟堂・清節堂・育嬰局・瘞局（埋葬場）等は主に商人の資金援助によるものであり、人々が「有する所の一切の経費は大半皆商捐より出ず」という所以である。以後光緒年間に至るまで、直接間接、自発的或は強制的にかかわりなく負担が割り当てられ⁸⁵、これらの慈善公益施設の維持もまた商人の資金援助によらねばならなかったのである。

上述の各地の地域商人による会館の建設、神仏祭祀幸福祈願、迎神賽会の推進、地方公益善拳の賛助等種々の营造地域文化活動は概して江南都市の地域文化をさらに豊富多彩にし、江南都市文化の内容にさらに深い趣を加え、また各地の地域文化の相互交流と相互練磨過程において不断に活動の再生を強め、江南都市に繁栄をもたらした。地域商人の活動は地域文化を伝承発展させる重要な手段であった。

四 文化的名士との交わり

繁華な明清江南都市は当時極めて重要な文化の中心であり、さらに江南文人が活動する重要な場所でもあった。これらの文化の中心において、商人と江南名士は各々好むところにおいて長所を発揮した。文人は世論の重要な製造者且つ伝播媒介者であり、毀誉褒貶の間にあつて、一般民衆に較べて大きな影響力をもっていた。商人はその地位が風雅の外にあることにより、上の人に取り入ることが多く、商人の中には自分自身儒者の風格をもち、一定の文化的素養をもち、文人と容易に詩文の応答を行うものもいた。一方、文人も商人が資金を多額に有することにより、利のあるところ故、驚が走るように商人に接近した。歙県の黄明芳は豊富な資金をもって交易につとめはげみ、「一時、人望が沈石田・王太宰・唐子畏・文徵明・祝允明の輩の如く、皆納交し間無し」⁸⁶⁾と言われた。歙商許の叔父が江南で商売し、「好んで某士大夫と遊ぶ」⁸⁷⁾。休寧商人の程鎖は、「乃ち喜んで折節に当世の賢豪巨儒と交わる」⁸⁸⁾。歙県の鮑簡錫は杭州で商売し、「四方の名流に結納し、鎬紵(友人間の贈物)が行き還り、幾んど虚日無し」⁸⁹⁾。歙県の潘君南は蘇州で商売し、「文名で以て天下の士と交わる」⁹⁰⁾。婺源の李賢は、「楽しんで賢大夫と親しくし、故に所在に随い、呉の士大夫は咸なこれと遊ぶ」⁹¹⁾。歙県の方遷曦は、「呉梁間に商い、至る所で豪杰に交納し、江湖の望(世間の誉れ)と為り、家業益々以て丕きく振るう」⁹²⁾。婺源の李廷芳は、「都に留まる諸縉紳と遊び、皆誼を行うを以て重きを推す」⁹³⁾。名士が執筆するこれらの商人伝はともすれば某商を「楽しんで士大夫と」遊ぶとか、「楽しんで士人と遊ぶ」と記している。これは文人・士人の視点に立つと、恥じらいながらもつとめて面子を保つということである。商人の視点に立つと、またどうして「士人楽しんでこれと遊」ばないことがあろうかということである。正徳・嘉靖時期、徽商の程楷兄弟は身分が高く度量が大きく、東では呉(江蘇)で商売し、北では魯(山東)で商売し、「乃ち呉魯の人皆楽しんで少君兄弟と遊ぶ」⁹⁴⁾。清初、蘇州で商売した休寧の人

江太一は、「遍く四方の賢人士大夫と交わり、凡そ士大夫で呉(蘇州)に至る者、門に造り投謁せざるもの無し(頼ってこない者はいなかった)。公は必ず供張(もてなし)を盛んにし、酒肴・筐篋(贈答品)、迎送の礼を具す。公は是に由つて好ましき客声を得」⁹⁵⁾。清前期、江南で商売した歙の人金公著は、「賢士大夫其の内の行い失無く、外に応ずること余りあると習見し、皆楽しんでこれと交遊」⁹⁶⁾。歙の人梅仲和は蘇州で商売に服し、「交遊を重んじ、楽しんで賢士大夫と款洽す(うちとけた)。姑蘇は冠蓋往来の地(多くのものが往来する所)にして、公の名を慕う者恒に廬に造り以て訪う」⁹⁷⁾。歙県の人黄存芳は、「賈人為りと雖も、而かるに言論風旨(物の言い方や風采)雅にして士人の標格(風格)あり、故に縉紳の輩楽しんでこれと交わる」⁹⁸⁾。

商人は広く四方の士大夫・江南の名士と交わったが、その動機は複雑であった。風雅を弄ぶ者は言うまでもないが、一旦貴人・名士より片言隻語を得れば、大きな玉のように珍重し、身分も持ち上げた。多くの人は名士という人望のある人の口にかけて世論を広め、美しく好ましい名声名誉を得、良賈・廉賈・義賈という姿を形作ろうと企図した。最も普遍的なものはおそらく子弟を養成する目的であったであろう。嘉靖・万暦時期歙商趙宏は漢代の人の口ぶりを踏襲し一人息子に、「黄金籬(かご)に満つも、一つの経(経典)に如かず」⁹⁹⁾と言った。徽商氣質を熟知している汪道昆が「子孫の計を為すに及び、寧ろ賈を弛め儒を張らん」¹⁰⁰⁾と考えていた。商売により利益をはかることは詩文を読み科挙試験に應ずる経済的基礎を築くためのものであった。士大夫名士は詩書の読書に富み、門生故吏が天下のすみずみにまでおり、商人は礼をもって館師(寺子屋の教師)にお願いする以外に、子弟に日々その門に通わせて、常にそれを科挙試験合格につながる道とする常套手段とした。当然、商人と士大夫名士は詩文を作り酒盛りをして往来するとともに、後援者を獲得することによって、商売上の競争、法廷での訴訟に関わらず、いつも勝利を得る者もいた。徽商は儒風の雅をもつ者が多く、子弟を養成して科挙試験に合格させ、任官して成功させ、人と

の訴訟でも常に勝利手形をもったが、これは彼等が政権をとる者と交際し、多くの名士と交流することを得意としたことと無関係ではない。

文人は商人が豊富な資金をもっていることを利益と考え、商人を衣食を提供する父母、寄寓する主人、賛助してくれる対象と見ていた。嘉靖・隆慶時期の人帰有光は、「今学を為す者、其の好むところは則ち賈のみ」¹⁰¹⁾と言っていた。そしてやや遅れて汪道昆は、「夫れ養う者賈に非ざれば饒（豊か）ならず、学ぶ者饒に非ざれば給さず」¹⁰²⁾と弁証法的に両者の関係を述べている。明末の李維楨は、「輓近世、賈人を以て詞人と為す者有り」¹⁰³⁾と述べている。当時の人々の商人より錢財を貰った後の媚態を風刺しているのがあった。乾隆・嘉慶時期の人錢大昕は当世の士大夫が「誦する所のものは礼義、好む所のものは名利なり」¹⁰⁴⁾と述べている。錢大昕よりやや早い時期の康熙・乾隆時期の人劉大櫟は「士大夫、名は仕籍（官吏の籍）に在るも、而かるに為す所は皆、賈豎（商人兼儒者）の事也」¹⁰⁵⁾と大層厳しく述べている。その言うところは、士大夫は一人の賈儒（商人兼儒者）に過ぎぬということであった。清前期の人董含が江南の風潮を論じて、「曩昔、士大夫清望を以て重きと為し、郷里の富人とともに伍を為すを羞じ、攀附（上の者に取り入る）せんとする者有らば必ずこれを峻絶す。今人財貨を崇め尚び、厚き資を擁する者有るを見れば、反って体を屈し志を降ろし、或は忘形（親密）の交わりを訂び、或は婚姻の雅を結ぶ」¹⁰⁶⁾と述べている。『大籟集』中に収められている江南民謡の注釈でも、「乃ち今の士為る者、商人の財多く、己の資を取る所無きを見る也、往往屈抑してこれに卑下し、而して商遂に儼然として自ら其の身を士の上に置く」¹⁰⁷⁾と認めていた。ここで述べられていることは話が誇大で実際と合っていないことはなく、指摘されているところの士人が主体的に商人と交際する現象はきわめて普遍的であった。その三つの例を見てみよう。

一つの例は明の無錫の人秦汧が経歴し記しているところである。嘉靖・万曆時期の徽商程公台は無錫で商売し、「公台の塵（店）には、当に夫れ四方より来集し、往来するものと応答する者は、皆肆中の人（店の人）其の事を代わると

聞こゆ。諸賈皆頻りに見えんと欲するも、公台頻りに接見する能はざるに迄り、諸賈窃かにこれを怪しむ。予四十年間北市に程公台有りて未だ其の面を知らずと習い聞く。一日、凝庵錢先生の席を過ぐるに、客彬然弦然とし（文采や音楽が盛んに行われ）、錢先生厳しく且つ敬しみ、儀文翔びらかに済し（饗宴の儀式を詳細に執り行ない）、席上皆名士を知る。中一人客と酬対し、言発すれば、座を挙げて率ね多く就て聴く者あり。予これを問えば、則ち曰く、〈此れ北里公台と称する所也〉と。予驚き疑う。既に諸先生の席を歷經し、往往にして公台に遇い、……自後凡そ諸門の高宴で、座上に公台無ければ則ち賓客將に以て歡を為すこと無し。然り而して北里の程氏の門に大賈踵武し（頻繁に至り）、貨賄の業繼のごとく（連続して）輻湊し（集まり）至り、日に益々以て富む也……今日は、群公、公台において屈して門下と致さんと欲し、亦士の心帰さざるものあらんかと恐る」¹⁰⁸⁾。徽商程公台は決して直接に商務を処理しないが、四方の商賈は常に彼に会おうと求めるが会うことができない。彼は日々知名の士と応対し、一言発するごとに一座の者は皆耳を澄まし、およそ諸門（多くの家）の宴会で、座に彼が居なければ一座のものは満足しなかった。諸名士は争い屈して門下に入ろうとし、その業務と財産は日々増加した。富商で名士グループの地位にあるものは、名士と富商が酒盃をさかんにやりとりし、暫しも離れることができないような状況であり、商人は接待で暇な日がないが、これは財富が日増しに増加することと関係しており、ここに極めて典型的に反映している。

別の一例は揚州塩商と名士である。「乾隆間、揚州の塩商方盛、名士多く往き之に依る。客を好むの商、数家あり、方笠亭と曰い、汪劍潭と曰う。梁昭明太子の生日に値り、文選樓に会す。時の諸名士まさに方に館らん（宿泊しよう）とし、而して汪、席間において諸名士に其の家に過ごさんことを邀し、群は諾して明日、榻（席）を移さんと言う。相ともに聯句するに困り、一詞成りて曰く、〈笠亭好むと雖も、いかで天天擾わさるを好むか。明日初三、飢腸（腹が減り）で劍潭にて吃う打点（準備）をす。昭明太子、我們を保佑し餓死を休む。太子言を開きて、爾、

家君（自分の父）と大いに縁がある」と言っ
たという¹⁰⁹。名士は塩商に依拠し、今日は甲の
宅、明日は乙の府と、至るところで何かにかこ
つけて、酒や食べ物を十分に頂戴して、古臭く
てまどろっこしい数句をでたらめに作りあげ献
上した。名士は富商に寄寓することを必要とし
ていることは以上から明らかである。

もう一つの例は著名な思想家洪亮吉が親しく
見聞したところである。「歳は甲午、余、揚州の
権署に館（やど）り、貧の故を以て、書院中で
肄業（修業）す。一日、薄暁、……忽ち一商人
を見、三品の章服の者にして、肩輿にて山長を
訪う。甫めて輿を下り、適々一肄業生趨り出で、
足もとにて恭しく商人に揖（へりくだ）りて曰
く、〈昨日、前日並びに曾府中に至り安否を叩歌
（拝謁）す、之を知るや〉と。商人甚だ傲り、
微かに頷き、答えざる也¹¹⁰。書生は連日、商
人の館に行きご機嫌伺いをしたが、面会はでき
ず、ばったり出会った時にはまた特に気持ちを
こめて挨拶をしたが、なんと三品虚官の商人は
相手にもせず、瞬きもせず、商人は傲慢に、劣
等生を軽蔑視していたことは、以上からわかる。
以上の二例は皆揚州であるが、しかし類似の状
況は江南でも存在していた。

商人から見れば、商人は才知により経営し利
益をはかり、文人は文化・文字によって生活は
はかり、道は異なるが、目的は同じであった。
従って、「良賈何んぞ宏儒を負わん」。商人が出
資し、文人からその場に適した詩作や死者を称
揚した墓誌銘を得ることによって、郷里で誇り
とされ、同業者より重んぜられた。文人は詩文
で応対し、絵画を描き、或は資金を取得するた
めに、直接原稿料をとり、益々多く売れば、
益々名声があがり、価格も益々高くなって、収
入も益々豊かになった。清初の湖州商人濮淙は、
交際するところは「皆俗を抜いた名流、清風高節
にして、皓皓として（清廉潔白で）群を出づる彦
にして、咸な詩篇に藉りて結納の費と為す¹¹¹」。

「咸な詩篇に藉りて結納の資と為す」とは文人
が商人と親密に交際し、それは具体的実的な
利益をもっていたことを説明していた。各地の
商人は江南で資力が豊かで経営がうまくいっ
ており、江南都市には多くの知識精鋭が集まり、
金銭世界に染まり、財産利益にせつちな江南

の名流は容易に商人に対して客観的な見方を形
成し、商人との往来を日常茶飯事とし、従って
商人と頻繁に往来し、原稿料をとり、盛大な宴
会をし、文思が泉のように湧き、金や財物が日々
使われた。この状況に対して、文人もときたま
一二白状している。古文大家の昆山の人帰有光
は、三呉（江南）の士大夫はすべて喜んで徽商
と交流したと認めていた。

宴席を盛んに行い、景色を鑑賞するほか、長
寿の祝文や墓誌銘を書くことが、別のとても普
遍的な文人と商人の往来の重要な内容であっ
た。万暦時期の公安の人袁中道はその状況を書
いて、「新安よりの素封の家（民間の資産家）多
く、而して文藻（文人）亦これに附す。黄金の
贅（礼物）而して白璧の酬（謝礼）、以て世の文
人に亮（指教）を乞う。世の文人はその懿美得
ざるに徴し、顧み指さし染まり頼にして（賢く）
屈を為し（服従し）、相ともにこれに貌（つつ）
しみ曰く、〈某某は能く義侠処士の行いを為す
ことあたう者也〉と¹¹²述べている。この種
の状況は、江南名士中では最も典型的なもので
あり、それはその文集からわかり、錢謙益、歸庄
等の人は均しく自ら経験し、非常に苦悩してき
たところである。しかしうわべは苦悩している
ようであるが、実際はこれを楽しんであきること
はなかった。真白な銀の前では、江南文人は
喜んで文章を書かない者はわずかであった。桑
玄は「平生未だ嘗て文字を白作せず（無駄に書
かない）」と自称した。唐寅は作画の収入で本題
を記録して「利市（利益）」とした。都穆は原稿
料を得るために病気となっても人のために文章
を書いた。祝允明は人のために絵画を描くにあ
たって、家柄を先に考えてから後に精神がある
かどうかを問うた（俗に言うところの人より銭
を取る精神である）。これらの人々はいずれも江
南の大名士であり、人品もまた当時誉れ高く重
んぜられていたが、原稿料を重視しないものは
一人もおらず、さらに平生は無駄に人のために
書かないと公言していたが、商人がこれらの大
名士に文章を頼むことはなかったであろうと考
えられる。江南文人と各地の商人の親密な関係
は完全に双方の自覚・自願からでていることは
明らかである。商人のために文章を書くことは
大切な経済的出所をつくるという動機の下にあ

り、帰有光、唐順之、王世貞・世懋兄弟、徐階、茅坤、焦竑、馮夢禎、董其昌、申時行、陳子龍、陳繼儒、李日華、張溥、張采、顧炎武、歸庄、錢謙益、吳偉業、汪琬、劉大櫨、徐乾学、王鳴盛、錢大昕等の江南の文人大家、或は高官、名流は或は徽商のために、或は寧波商のために、或は福建商人及びその家族等のために一篇の褒め称える言葉に満ちた祝賀文、墓誌銘、伝記末尾の賛辞を書いた。

周暉は『二統金陵鎖事』の中でこの類の一つの逸話を書いていた。「鳳州公は詹東図と瓦官寺の中に在り。鳳州公偶々云う、〈新安賈人は蘇州の文人を蠅衆の一臚の如しと見る〉と。東図曰く、〈蘇州文人は新安賈人を蠅聚の一臚の如しと見る〉と。鳳州公笑いて語らず。」鳳州公は王世貞であり、詹東図は詹景鳳である。江南文人が蠅のように商人に群がり、才名が大きく、官位が高く、資産が豊かな太倉の王世貞でさえもこの疑いを避けることができず、人に罵られていた。そして商人も文人に蠅のように群がって、則ち「家業益々以て丕きく振るう」。名士は商人を経済的後ろ盾とすることによって、風雅の手本となり、作詩作曲の手本となれた。商人は名士に鼻屑にされることにより、奸貪が義廉（礼儀正しく廉潔）であると言われ、俗物が雅士（風流人）と言われ、商売は益々大きくなり、民衆との矛盾も緩和された。文人と商人、お互いの意気投合は益々顕著となった。王世貞と詹景鳳との対話では商人と文人関係がよく描写されている。商人と文人はもともと相互にすがりついており、相互に利用しあっており、各々求め合っており、各々その居場所を得ていたという関係であったことは明らかである。

注

- 胡応麟：『少室山房筆叢・甲部・経籍会通四』。
- 『雑記』，張海鵬等主編『明清徽商資料選編』第206頁，黄山書舎，1985年より転引。
- 甘熙：『白下瑣言』卷二。
- 張秀民「明代南京的印書」，『文物』1980年第11期参照。
- 張秀民「明代南京的印書」，『文物』1980年第11期。
- 方一桂：『士商類要序』，楊正泰『明代駅考』附，第234頁，上海古籍出版社，1994年より転引。
- 王振忠：「稀見清代徽州商業文書抄本十種」，『華南研究資料中心通訊』第20期。
- 黄汴：『天下水陸路程序』，北京図書館古籍珍本叢刊本。
- 道光『涪墅閩志』卷五「小販則例」。明清江南紙張の来源については拙著『明清江南商業的發展』第89～91頁，南京大学出版社，1998年を参照されたい。
- 江蘇省博物館編：『江蘇省明清以来碑刻資料選集』，北京三聯書店，1959年，第358頁。
- 上海博物館編：『上海碑刻資料選輯』，上海人民出版社，1980年，第280頁。
- 陳支平・鄭振滿：「清代閩西四堡族商研究」，『中国經濟史研究』1998年第2期。
- 江蘇省博物館編：『江蘇省明清以来碑刻資料選集』，北京三聯書店，1959年，第362頁。
- 江蘇省博物館編：『江蘇省明清以来碑刻資料選集』，北京三聯書店，1959年，第377頁。
- 帰有光：『震川先生集』卷九「送童子鳴序」。
- 民国『太倉州志』卷二五「雑記」。
- 江蘇省博物館編：『江蘇省明清以来碑刻資料選集』，北京三聯書店，1959年，第74頁。
- 蘇州歴史博物館等編：『明清蘇州工商業碑刻集』，江蘇人民出版社，1981年，第363頁。
- 『歙西竹枝詞』，汪慶元「徽学研究要籍叙録」，『徽学』第2卷，安徽大学出版社，2002年より転引。
- 汪道昆：『太函集』卷五九「明封徵士郎莆田陳長者墓誌銘」。
- 汪道昆：『太函集』卷五二「明故太学生呉用良墓誌銘」。
- 袁宏道：「新安江行記」，『袁中郎隨筆・游記卷』。
- 李維楨：『大泌山房集』卷一〇二「呉節母墓誌銘」。
- 『塵余』卷三。
- 黄崇惺：『草心樓讀画集』，『美術叢書』第1集に見える。
- 王世貞：『觚不觚録』。
- 袁宏道：『瓶花齋雜録』。
- 沈德符：『万曆野獲編』卷二六「玩具・時玩」。

29. 乾隆『蘇州府志』卷二一「風俗」。
30. 乾隆『長洲縣志』卷一一「風俗」。
31. 錢泳：『履園叢話』叢話十「演戲」條。
32. 江蘇省博物館編：『江蘇省明清以來碑刻資料選集』，北京三聯書店，1959年，第284～294頁。
33. 侯方域：「馬伶傳」，『虞初新志』卷三。
34. 錢謙益：『列朝詩集小傳』丁集下「潘太學之恒」條。
35. 龔自珍：『龔定庵全集類編』卷一一「書金伶」。
36. 徐樹丕：『識小錄』。
37. 徐珂：『清稗類鈔·豪侈類』「典商汪己山之侈」條。
38. 張雨林：『晉昆考』，中國電影出版社1997，第14頁。
39. 徐珂：『清稗類鈔·戲劇類』「郭某始創戲園于蘇州」條。
40. 顧祿：『清嘉錄』卷七「青龍戲」。
41. 顧公燮：『消夏閑記摘抄』卷上。
42. 袁學瀾：「虎阜雜事詩」，蘇州市文化局編『姑蘇竹枝詞』第370頁，百家出版社，2002年。
43. 王韜：『瀛壖雜誌』卷二。
44. 周昭京：『潮州會館史話』上海古籍出版社，1995年，第8頁。
45. 道光『佺山忠義鄉志』卷一二「金石下」。
46. 錢泳：『履園叢話』叢話十二「演戲」。
47. 徐珂：『清稗類鈔·戲劇類』「昆曲戲」條。
48. 江蘇省博物館編：『江蘇省明清以來碑刻資料選集』，北京三聯書店，1959年，第295～297頁。
49. 納藍常安：『宦游筆記』卷一八「南廩貨物」。
50. 甘熙：『白下瑣言』卷二。
51. 江蘇省博物館編：『江蘇省明清以來碑刻資料選集』，北京三聯書店，1959年，第442頁。
52. 蔡世遠：「漳州天后宮記」，乾隆『吳縣志』卷一〇六「芸文」。
53. 余正健：「三山會館天后宮記」，乾隆『吳縣志』卷一〇六「芸文」。
54. 謝鍾齡：「邵武會館天后宮記」，乾隆『吳縣志』卷一〇六「芸文」。
55. 林鴻：「延建會館天后宮記」，乾隆『吳縣志』卷一〇六「芸文」。
56. 江蘇省博物館編：『江蘇省明清以來碑刻資料選集』，北京三聯書店，1959年，第442～443頁。
57. 顧祿：『清嘉錄』卷五「閔帝生日」。
58. 拙著『明清江南商業的發展』第258頁，南京大學出版社，1998年參照。
59. 蘇州歷史博物館等編：『明清蘇州工商業碑刻集』，江蘇人民出版社，1981年，第355頁。
60. 蘇州歷史博物館等編：『明清蘇州工商業碑刻集』，江蘇人民出版社，1981年，第340頁。
61. 上海博物館編：『上海碑刻資料選輯』，上海人民出版社，1980年，第336頁。
62. 上海博物館編：『上海碑刻資料選輯』，上海人民出版社，1980年，第326頁。
63. 上海博物館編：『上海碑刻資料選輯』，上海人民出版社，1980年，第196頁。
64. 程先甲：『金陵賦』。
65. 甘熙：『白下瑣言』卷四。
66. 陳宏謀：『培遠堂文檄』卷四五「風俗條約」。
67. 康熙『蘇州府志』卷二一「風俗」。
68. 康熙『松江府志』卷五四「遺事下」。
69. 康熙『常州府志』卷九「風俗」。
70. 「太平軍兩次攻占杭州親歷記」，王慶成『稀見清世史料并考積』第372頁，武漢出版社，1998年所載。
71. 光緒『嘉定縣志』卷八「風俗」。
72. 『蕪鄉贅筆』，光緒『楓涇小志』卷一〇「拾遺」參照。
73. 黃印：『錫金識小錄』卷一「備參上」。
74. 鄭光祖：『一斑錄』雜述三。
75. 光緒『嘉定縣志』卷八「風俗」。
76. 乾隆『佺山忠義鄉志』卷三「鄉事志」。
77. 李樂：「壽聖塔院呈稿」，萬曆『烏青鎮志』卷四「芸文志」。
78. 上海博物館編：『上海碑刻資料選輯』，上海人民出版社，1980年，第1～3頁。
79. 上海博物館編：『上海碑刻資料選輯』，上海人民出版社，1980年，第10～18頁。
80. 上海博物館編：『上海碑刻資料選輯』，上海人民出版社，1980年，第19頁。
81. 上海博物館編：『上海碑刻資料選輯』，上海人民出版社，1980年，第32～36頁。
82. 江蘇省博物館編：『江蘇省明清以來碑刻資料選集』，北京三聯書店，1959年，第441頁。
83. 蘇州歷史博物館等編：『明清蘇州工商業碑刻集』，江蘇人民出版社，1981年，第302頁。
84. 蘇州歷史博物館等編：『明清蘇州工商業碑刻集』，江蘇人民出版社，1981年，第306頁。
85. 『善舉塩捐案』。

86. 張海鵬等主編：『明清徽商資料選編』，黃山書舍，1985年，第82頁。
87. 歸有光：『震川先生集』卷二三「勅贈翰林院檢討許府君墓表」。
88. 屠隆：『白榆集』卷一九「程處士傳」。
89. 張海鵬等主編：『明清徽商資料選編』，黃山書舍，1985年，第144頁。
90. 湯顯祖：『湯顯祖集』卷四〇「有明處士潘仲公暨吳孺人合葬志銘」。
91. 張海鵬等主編：『明清徽商資料選編』，黃山書舍，1985年，第168頁。
92. 張海鵬等主編：『明清徽商資料選編』，黃山書舍，1985年，第439頁。
93. 張海鵬等主編：『明清徽商資料選編』，黃山書舍，1985年，第139頁。
94. 唐順之：『荊川先生文集補遺』卷五「程少君行狀」。
95. 汪琬：『堯峰文鈔』卷一五「江太一墓誌銘」。
96. 劉大櫟：『劉大櫟集』卷七「金府君墓表」。
97. 歙縣『濟陽江氏族譜』卷九，張海鵬等主編『徽商研究』第315頁，黃山書舍，1985年より転引。
98. 歙縣『竦塘黃氏宗譜』卷五，『徽商研究』第315頁，黃山書舍，1985年より転引。
99. 焦竑：『澹園集』卷三〇「趙翁仁卿墓誌銘」。
100. 汪道昆：『太函集』卷五二「海陽處士金仲翁配戴氏合葬墓誌銘」。
101. 歸有光：『震川先生集』卷一九「詹仰之墓誌銘」。
102. 汪道昆：『太函集』卷四二「明故程母汪孺人行狀」。
103. 李維楨：『大泌山房集』卷四八「贈余隱士序」。
104. 錢大昕：『潛研堂文集』卷四九「布衣陳君墓碣」。
105. 劉大櫟：『劉大櫟集』卷五「鄉飲大資金君傳」。
106. 董含：『三岡識略』卷六「三吳風俗」。
107. 『天籟集』，王振忠「〈徽州朝奉〉の俗語学考証」，『中国社会經濟史研究』1996年第4期より転引。
108. 秦沂：『自問稿・程公台伝』。
109. 徐珂：『清稗類鈔・詼諧類』「打点飢腸吃劍潭」条。
110. 洪亮吉：『更生齋語言甲集』卷四「又書三友遺事」。
111. 積本黃：『濮澹軒先生集』，乾隆『濮鎮紀聞』卷三「記伝」。
112. 袁中道：『珂雪齋集』卷一八「新安吳長公墓表」。

Regional Merchants and the Urban Culture of Jiangnan in the Ming and Qing Dynasties

Jinmin FAN

(translated by Yoshio Matsuda)

During the Ming and Qing Dynasties, the guest regional merchants in Jiangnan, the area south of the Yangtze River, were engaged in the management of various kinds of stationery, and thus they promoted the cultural market of the Jiangnan cities. They established theatrical companies and sponsored their opera performances, and therefore assumed a very important role in advancing the intertexture of various regional operas and cultures of the Jiangnan cities. They glorified Chinese folk customs and culture, admired regional gods, participated in folk-custom activities, and invested in or sponsored construction for religious and cultural uses, like temples and monasteries, as well as exquisite assembly halls. In this way they brought richer and more colorful regional cultures to Jiangnan cities. They kept intimate relations with the personages of Jiangnan on the basis of mutual utilization, mutual needs and mutual benefits.

Keywords : settler from another place, regional merchants, Jiangnan,
urban culture, personage